



## 年間第 4 主日 (ルカ 4:21-30)

イエスの言葉の意味を知るまで思い巡らせる

今週の朗読箇所は先週の続きです。「はっきり言うておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」(4・24)という箇所から学びを得て、生活に活かす糧を持ち帰ることにしましょう。

26日(火)、司祭団マラソン大会の日でした。直前の日曜日と月曜日はご承知の通りまれに見る大雪でした。下五島も同じ状況で、マラソン大会の前日、月曜日の時点で大会中止の判断が下されたそうです。日曜日と月曜日、福見教会と浜串教会との間の雪道を歩いて結構なトレーニングを積んだので、マラソン大会中止の知らせはちょっと残念でした。

福音朗読に戻りましょう。郷里の人々は「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」(4・21)と驚きの言葉を語ったイエスにこんな言葉を投げかけました。「この人はヨセフの子ではないか。」(4・22)

郷里の人々は、イエスのことを十分理解しているつもりでした。父親が誰で、母親が誰であるか、親類の人がだれであるか知っていたからです。身内を前にしているのだから、身内を喜ばせる言葉を語るだろう。そんな予測を立てています。

ところが、イエスは予想だにしない言葉を口にしたのです。「はっきり言うておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」郷里の人々は驚き怪しみ、理解できないばかりかついには憤慨し始めます。もはや、郷里の人々の心は一步も前に進めない状態になりました。冷静さを失ってしまい、考えることができなくなっていたのです。

イエスの言葉は、郷里の人々には痛みを感じるほど強い言葉でした。ここで大切なことは、イエスがむやみにそんなきつい言葉を放つだろうか、もう少し考える姿勢です。向けられた言葉を、もう少しよく考えてみる。そんな捉え方が必要でした。

イエスがきつい言葉を使うからには、それなりの理由があるはずです。優しく語りかけることも知っている方が、あえて厳しい態度で臨むのですから、理由があつてのことです。理由があるのだなと考えたなら、さらにもう少しその理由に迫ろうとしたことでしょうか。ところが郷里の人々は、イエスの言葉を聞いた時、「何をー！」という反応を取ってしまったのです。

わたしも一度、きつい言葉をかけられてお先真っ暗だと感じたことがあります。浦上教会の助任司祭を5年務めた後に、転勤の辞令がやってきました。次の任地は滑石教会の助任司祭でした。早めに滑石教会の主任司祭にあいさつに行こうと思っていましたが、思いがけずその機会が巡ってきました。先輩司祭が亡くなって浦上教会で教区葬が行われたときだったと思います。

教区司祭が亡くなると司祭はみな葬儀に参列しますので、滑石教会

の主任神父様もおいでになりました。滑石教会の神父様は浦上教会の主任神父様と親しくしておられたので、司祭館に立ち寄られたのです。これはチャンスと思い、スリッパをサッとお出して、「神父様、4月からはお世話になります。」と声をかけたのです。

すると滑石教会の神父様の返事は意外なものでした。「お前か。今度うちの助任に来るのは。もっとピチピチしたとばもらえらと思っていたら。煮しまつとるじゃないか。お前なら要らん。」とバツサリ切り捨てられたのです。

わたしはひとことも返せず、浦上教会の主任神父様の部屋に入っていくのをただ眺めるだけでした。内心「うわー、きつつい神父様だなあ。今度の主任神父様にはとてもじゃないけれどもお仕え出来そうにない。」と思ったものです。

滑石教会の神父様の言葉の真意を知ったのは、滑石教会に着任して数か月後のことでした。この神父様はわたしとの最初のやり取りをその日のうちに滑石教会の役員に話し、「浦上教会で5年も鍛えてもらった助任をもらうことになった。わたしが手取り足取り教える必要もない頼もしい助任司祭だ。」と自慢げに紹介してくれていたのだそうです。

そうとは知らないわたしは、気分は滅入っていたのでした。けれども、きっと新しい主任神父様の考えがあるに違いない。そんな思いも一方では持っていました。それは正解でした。もし新しい主任神父様の思いを誤解していたら、わたしは道を逸れていたかもしれません。

イエスの郷里の人々も、イエスの言葉をもっとよく考えたら、イエスを受け入れることができたのだと思います。「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」こう言われた時に、「何をー！」と思わず、自分たちには何が足りないのだろうか、真剣に考えたなら、違った道に導かれたのではないのでしょうか。

わたしたちもふだんの生活を見つめましょう。わたしたちの周りの人々は、必ずしも人当たりの優しいものばかりではありません。どうしてこんな目に遭わなければならないのだろうかと感じることも多々あると思います。予想もしない仕打ちを受ける時、「少し考えれば、意味が分かるかも知れない」そう考える心の準備が必要です。やみくもに困難や試練が来るはずはない。あの人、何も考えなしにあんなことを言うはずがない。きっと何かを教えてくれているはずだ。そんな受け止め方を繰り返し言い聞かせるなら、道は開けるのではないのでしょうか。

皆さんにも何か行き詰まっていることがあるかも知れません。投げ出したくなるような十字架を抱えているかも知れません。それでも、イエスがむやみに今の困難を目の前に置くとはいえないのです。何か、わたしへの思いを知らせようとして、今があるのではないのでしょうか。

「もう少し考えてみよう」「何か、考えさせているに違いない」そんな姿勢を保って、イエスに従って歩みましょう。「イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。」(4・30)先へ進もうとされるイエスを見て、わたしたちも今日の一步を進めることにしましょう。